

3: 罪とは

1:「罪人」とは

日本語で「罪」と聞くと、刑法に触れるような犯罪を思い起こします。けれども、犯罪の大小の問題ではなく、決まりが破られた、という事自体に注目する必要があります。世の中には様々な決まり事があり、全ての国は、独自の法律を持っています。国々で共通する法律も見られるでしょう。例えば、「盗んではいけない。」というのはどこにでも共通する法律です。あるいは、シンガポールではガムの販売は違法だという独特な決まり事があります。法律とは、その国の人々に要求されている基準です。また、物理の法則(例:引力)や自然の法則(例:種が成長するには、水や栄養が必要)、という世の中の一般法則もあります。

そのような自然の法則のように、神の完全な義と神聖さは、それ自体が神の法則です。神はご自身の律法を完全に守られるので、聖なるご性質を破るようなことは決してなさいません。神は何でもできるお方ですが、一つだけどうしてもできないことがあります。聖書では神は「嘘をつくことができない」と言っています。確かに、神が嘘をつくことは不可能でしょう。なぜならそうすることで、神は神聖ではなくなってしまうからです(民数記23:19)。法律がその国民の安全を守るためにあるように、創造主である神は、造られた者たちが最善に生きるための決まりを持っておられます。神の持つ基準と合わないものはなんでも罪なのです。神の法則を破るなら、結果として神との親しい関係は失われ、隔たりができてしまいます。

「1:神とは」で学んだように、神は純粋で神聖であり、不義や悪とともに住むことはできません。「墮落」により、アダムとイブの子孫すべてが罪の性質を持ってしまったことを学びました。私たちが罪を犯してしまうのは、墮落した状態ゆえです。私たちは皆、罪の性質を持って生まれているので、神の義(正しい基準)にかなった生活をすることはできません。大きな犯罪であろうと、些細な嘘や不純な考えであっても、すべての人が何らかの形で罪を犯してしまっています。

ローマ書3章23節

「すべての人は罪を犯したので、神からの栄誉を受ける事ができず、。。。」(23節)

ローマ書3章10節

「義人はいない。ひとりもない。悟りのある人はいない。神を求める人はいない。すべての人が迷いでて、みな、ともに無益な者となった。善を行う者はひとりもない。」(10-12節)

「2:人間とは」で見たように、人間は本来、神様と親しい関係にあり、尊い存在として造られましたが、罪が世界に入り、神様との良い関係は断ち切られてしまいました。罪とは神様から離れている状態なので、自分には関係ないという無関心や神様を無視することも含まれます。しかし、神様は、私たちと離れていることを嬉しくは思っていない。

エゼキエル書18章32節

「わたしは、だれが死ぬのも喜ばないからだ。一神である主の御告げ。一だから、悔い改めて、生きよ。」

2:罪への自覚

罪の自覚は、以下のように、主に3つの方法によってでてくるでしょう。

一人間は良心というものが与えられているので、善悪の基準も自分自身の良心から判断することが多々あります。(ローマ2:15)もし何か、悪いことをしたとき、自分の良心ゆえ、あの行いは間違いだった、と自然に思えることもあります。

一法律やその他の決まりごとは、聖書に書かれています。それによって、善悪の基準を知ることができます。また、自分が何か悪いことをした時、善に反することをしたと自覚できます。(ローマ7:7)

一罪に対しての自覚がもてるのなら、その人の心には神様がすでに働いているとわかります。(ヨハネ16: 7-11)

古代から、「人間と自然はもともと清いのか?」それとも「邪悪なのか?」という問題に向き合ってきました。その問いには答えるのが難しいことがわかります。私たちは人々の内に善を見ますが、人間と自然の両方に痛みと困難をもたらす悪の要素もあります。「2:人間とは」で学んだように、その答えは両方にあるとわかります。人も自然も聖なる目的をもって創造されましたが、墮落した状態により、悪はその目的を崩壊させました。そのため、私たちはその聖なる性質を回復する道を探す必要があります。

日本文化において、人は清くあるべき存在だという価値観が見られます。例えば、お寺や神社に入る前、おはらいの儀式や手を洗うことによって身を清める習慣があります。しかし、もしそれらによって私たちが完全にきれいな状態にされたとしても、清めの儀式をやめた途端、人の心に満ちる悪意や欲、自己中心のような思いによってまた不純な状態に戻ってしまいます。

うそをついたり、自己中心的な考えをしたり、誰かをねたんだりしたことはない人はるでしょうか?また、罪とは悪い行いや考えだけのものではありません。良いこと、正しいこと、すべきことがわかっているながら、それらをしないことも罪です。例えば、助けることができるのに、他者の必要を無視することなどです。私たちは、他者から自分の罪を隠そうとし、隠れていれさえすれば、神様もそれを知ることもないと考えがちです。けれども、神様は全てを知っておられます。

もしかすると、これらのことを思いおこす時、自分の至らないことや罪が明らかになり、苦い想いをするかもしれません。しかし、聖書の中にこれらの罪や苦み解決してくれる希望を見つけることができます。驚くべきことに、罪の問題への解決は、いい人になるために努力をすることではないのです。まず、自分の力で真に清く正しい者にはなることができない、ということを受けれることが大切です。そして、他の解決方法を見つけなければいけません。神様がその方法を決められたのです。

次に続くセクション、「4 キリストの十字架とは」、「5 救いとは」では、神様が持っておられる罪の解決について学びます。自分自身について探求するために、心をオープンにして学んでいきましょう。

(なくなった)人間は清く正しい存在だが、社会に出ることによって悪いものがつくので、
(なくなった)私達はこの世に生まれた時から、創造主なる神との関係が壊れています。聖い神から180度離れたところ、つまり罪の状態の中にいます。ですから、どんな人でも、神が喜ばれない悪いことを考えたり行ったりして当然なのです。

(なくなった)日本文化において、性善説(中国の儒家・孟子の言葉。ビジネスでは、例えば、例えば、「性善説」に基づいて取引を行う場合、“相手が善人であり決して嘘をいわない”“きちんと契約してくれる”ことを前提に取引を交わすこ

ととなります。) 生まれながらにして人間は清い)と言われる神道に根ざした価値観を持っているので、その中で育った私達は必然的に罪への意識が薄いものです。

性善説(中国の儒家・孟子の言葉。ビジネスでは、例えば、例えば、「“性善説”に基づいて取引を行う」場合、“相手が善人であり決して嘘をいわない”“きちんと契約してくれる”ことを前提に取引を交わすこととなります。)